《修士論文要旨》

モンゴル国・チントルゴイ遺跡における古環境調査

—草原都市遺跡の植生復元—

豊　島　佳　澄*

Ⅰ．目的

本論文の目的は11世紀に契丹（遼）によって改修され、王朝支配領域の辺境防衛と地域間交流の場として繁栄したモンゴル国所在の城郭都市チントルゴイ遺跡に対する現地での植生調査や花粉分析を通じて周辺古環境の復元と、都市生態系を考察することにある。

現在、遺跡周辺は遊牧民が夏営地として一定期間定住する以外、生活を営む者はなく、その遊牧民たちも草本類が豊かな季節が終われば移動して行き、人間のそこでの生活は無くなる。遺跡を取り巻く平原には燃料や建材として使用できるような森林資源は無く、遠く緩やかな稜線を見せる山岳地帯に分布するのみである。

しかし、草原に忽然と出現する巨大な遺跡の存在はそこで確かに過去の一定期間、「契丹（遼）」という領域国家の辺境地域経営のための都市が営まれ、人々の定住と窯業などの生業活動が展開され、それらを支えるだけの「環境」が存在していた事を示している。

年間を通じての著しい気温差、乾燥環境、森林資源の乏しさといった環境条件の中で、歴史書にあるような生活は如何にして営まれたのか、或いは史書が描く当時の生活は本当の姿を描いているのか、そもそも現在とは環境条件が異なっていたのか、植生環境という人間生活の土台を左右する条件の考察から挑戦したい。

Ⅱ．方法

現在までに行われている契丹（遼）とそれに前後する時代の遺跡に関する考古学・歴史地理学といった先行研究の成果を踏まえ、また、古気候学、農学といった関連分野の研究を俯瞰し、モンゴル高原における人々の生活基盤等に関する考察の基礎を作る。

現地調査で得た遺跡周辺の地形や植生環境を踏まえ、土壌試料からの花粉分析を行い、遺跡の周辺の植生環境や気候に関する考察を行う。

Ⅲ．結果と今後の展望

花粉分析の結果からは遺跡周辺での燃料・建材としての森林資源の存在をはっきりと確認する

平成24年度　*文学研究科文化財史料学専攻

事はできず、現在の景観と異なるものが遺跡周辺に展開し、人々の生活基盤を支えていたか否かに関して明確な回答を得ることは出来なかった。しかし、モンゴル高原の草原で営まれた都市遺跡の古環境を復原し、その経過と結果から歴史的意味を考察する事は人間の定住と環境の関わりを考える上で非常に重要な課題である。化学分析の結果とは必ずしも思う通りの結果が得られるというものではなく、予想以上に花粉の抽出が困難であることを改めて痛感し、サンプリングの方法や採集場所の設定など改良すべき点、新たに取り入れるべき手法も様々考えられた。